

英米文化の背景 英米人の迷信・俗信考 (16)

Ⅳ 年中行事—その5 聖霊降臨祭・女王陛下誕生日・夏至祭と前夜・アメリカ独立記念日

藤高 邦宏

倉敷芸術科学大学生命科学部

(2007年10月10日 受理)

はじめに

いずれの時代、いかなる文化においても、人々は諸祭を催し諸行事を行ってきた。人々は豊かな実りと平和な日々を願い、今日と未来の幸福を希求しつつ生きてきたのである。単調になりがちな日々の生活の中で、自らの心と体に活力を与えるものとして諸祭、諸行事は人々にとって欠かせないものであろう。

今号では、聖霊降臨祭、女王陛下誕生日の祝い、夏至祭と前夜祭、またアメリカ独立記念日の祝い等の習慣とそれまつわる迷信、俗信の考察を試みたい。

1 聖霊降臨祭 Whitsun

この祝日はペンテコステの祝日 Pentecost とも呼ばれ、復活祭 Easter 後50日目に当たる移動祭日である。かつてより伝えられるところでは、この日の朝、使徒たちが家に集まっていると聖霊が炎の舌のようになって降臨されたことを記念する祝日とされる。

この Whitsun の語の由来については、2つの説があるとされる。前述のキリスト降臨の「奇跡」によって、使徒たちは自らのなすべき務めを知った (wit) とされることから「知者の主日」Wit Sunday となり Witsun となったとの説がある。また別の考え方では、この whitsun は、復活祭後50日めにあたるこの頃には多くの洗礼が行われ、その受洗者は白衣 (White) を着用する習慣があったところから、それが「白衣の主日」White Sunday となり、これが Whitsun となったとされる説がある。¹⁾ この2説については、一般に後者の説が正当とされるようである。

ところで、この聖霊降臨の祝日に関して伝えられる俗信に次のようなものがある。

* 「この祝日には何か新しい衣服を身につけるのがよいとされた。」これはイングランドを起源に古くから言われていたようであるが、「そうしないと幸運に恵まれない」とか、よく言われるのは、「そうしなければ鳥が飛んできて糞を落とす」という信がある。これに関して、R. Chamber, *The Book of Days* に次の記述が見られる。

If you would have good-luck, you must wear something new on 'Whitsun-Sunday'

(pronounced *Wissun-Sunday*). More generally, Easter Day is the one honoured, but a glance round a church or Sunday-school in Suffolk, on Whitsunday, shews very plainly that it is the one chosen for beginning to wear new 'things.'²⁾

(幸運に恵まれたかったら、聖霊降臨の祝日には何か新しいものを着なければならぬ。より一般的には、イースターに新しいものを着ることが多いが、サフォーク州では聖霊降臨祭の日の教会あるいは日曜学校を見れば、その日が新しい「もの」を着始める日として選ばれていることがすぐ分かる。)

また次のような俗信も見られる。

- * 「聖霊降臨祭に生まれるのは大変運が悪く、果ては殺人者になるか、殺害されるかの運命を背負っている」と言われる。この根拠は明らかではないが、これに関し Pickering は、*Cassell Dictionary of Superstitions* で次のように記述している。

Another superstition maintains that those unlucky enough to be born at Whitsun are destined either to kill or to be killed.³⁾

(別の俗信が伝えるところでは、聖霊降臨祭に生まれるほどの運の悪い人々は、殺人をするか殺害されるかの、いずれかの運命を背負っている。)

因みに、アイルランドでは、この日に運悪く誕生した子供たちに対しては、その運命を変えるための風変わりな模擬埋葬の儀式があると伝えられている。

In Ireland, the custom is particularly linked with children born at WHITSUN, who are allegedly fated to kill or be killed. ... 'dipping' someone repeatedly into an open grave is said to be effective ...⁴⁾

(アイルランドでは、その習慣は特に聖霊降臨祭の日に生まれた子供たちに結び付けられる。彼らは伝えられるところでは、殺人をするかあるいは殺害されるかの運命を背負っている。、、、掘られた墓穴に繰り返し「入れる」と効果があると言われている、、、)

またこの日に備えて各地の教区では教会員がモルトを仕入れ、このモルトから強いエールやビールが造られ、教会内やその他特定の場所で売りに出されることがある。

- * 「この酒樽の一番近くに座り一番多くの金を使う者が、教区民のうちで最も信心深い人である」と言われたりしたようである。⁵⁾

2 女王陛下誕生日 The Queen's Official Birthday

この日は、イギリス国民にとって女王に祝福を捧げる大切な日である。エリザベス II 世

女王は1926年4月21日の誕生であるが、6月の第2土曜日を公的誕生日と定めて祝われている。

当日の朝11時に、ロンドンのハイドパークにて祝砲が撃たれる。1904年以来の伝統とされるが、6つの砲台車が6頭の馬に引かれて定位置につく。近衛騎馬砲兵隊の将兵が赤襟の青軍服に黒の毛皮の高帽、そして騎馬用長靴に白手袋というきらびやかないでたちで任に当たる。彼らは砲台車の後ろに片ひざをついた姿勢で構え、正に11時に10秒間隔で41発の一斉祝砲を撃つ。またこの日には伝統的な軍旗敬礼分列式 Trooping the Colour も華やかに行われる。この儀式時には常に女王陛下が、軍旗(連隊旗)が捧持行進されるその連隊の制服を着用されて出席される。

いずれの国の軍隊においても同じかもしれないが、連隊旗はかつての野戦場では味方を識別する大切なものであったことから、今日でもこの日女王陛下の前で公に連隊旗を掲げて行進する伝統があり、連隊将兵は女王陛下に敬礼を捧げる習慣がある。

近衛騎兵旅団(現在3個連隊)の軍旗分列行進が、ホワイトホール Whitehall の広大な地で軍楽隊による音楽の中で行われるが、女王は乗馬して旅団を閲兵される。将兵は音楽に合わせて訓練された正確さで行進する。歩兵たちの列が整然とあちこちに行進し、軍旗が衆目に触れるべく行進されるのに続いて歩兵隊列が女王の前を通過し、続いて騎兵隊列が常歩(なみあし)と速歩(はやあし・だくあし(だく足))で女王陛下の前を過ぎる。これは200年以上前にジョージ二世王 King George II によって始められた儀式とされるが、いかにもイギリス国家と国民の誇りを象徴するかのごとく思われる、極めて厳かでありかつ実に華麗な儀式である。今日ではこの伝統儀式を、世界の各地においてテレビニュース等で垣間見ることができる。

(なお、この祝祭日は新しい時代の中に始まったものであるがゆえに、この日の行事や人々の生活に関しての迷信、俗信めいたものはまず見られない。)

3 夏至祭と前夜祭 Midsummer Day & Eve

夏至は1年中で昼間が最も長く、太陽が天空に最も高く昇る日である。夏至祭 Midsummer Day は暦の上では6月21日(22日)であるが、洗礼者ヨハネ St. John Baptist の誕生日の6月24日に振り当てられている。洗礼者ヨハネはキリストよりも6ヶ月早く誕生したとされる(ルカによる福音書第1章第36節)ところから、ヨハネの祭日はキリスト降誕祭 Christmass の6ヶ月前と定められている。

もともと夏至祭はヴァイキングによって守られてきた祭りであったが、キリスト教会はこの異教徒の祭りのキリスト教化を図った。そこで本来の夏至の日を数日繰り下げて洗礼者ヨハネ祭に習合させ、キリスト教会の祭りとして取り込んでしまった。ところが祭り本来の異教的要素は、変わることなくそのまま続けられていたのである。

夏至祭は、もう一つの夏祭りである五月祭と類似の行事をもっていた。その中には夏祭

り柱 Summer Pole を立て、その周りで踊る習慣があるが、これは五月柱 Maypole に関する習慣と同じである。この他に、両者に類似の行事としては、各地の山頂でかがり火を焚く習慣がある。

また夏至祭については、当日よりもその前夜に行われる行事のほうが重要性をもち、またそれにまつわる俗信等も多く見られる。かつてかがり火は、イングランドの大半とスコットランド低地地方と東部地方、北方のオークニー諸島とシェトランド諸島で盛んであった。イングランドの南部や中部地方では、かがり火の行事は18世紀には姿を消したものが多かった。しかしその他の地域では、ヴィクトリア朝時代に入ってもその習慣が続けられた。特にスコットランドでは教会の禁止令にもかかわらず、各地のかがり火は燃え続けていた。⁶⁾ これに関して次のようなことが言われた。

- * 「かがり火は太陽が地平線に沈む瞬間に点火されなければならない。」これは各地に見られるいずれのかがり火も「太陽を象徴するもの」である、という根源的な考え方が明確に現れたものであろう。
- * 「かがり火の火をたいまつに移し、高くかざして農場の周りを右回りに回り、農作物の豊穰を祈願した。」右回りについては、やはり太陽の運行から来るものである。かがり火と同じ意味合いで焚かれる火、つまり浄火もあった。2本のオークの木をこすり合わせて起こされた元火は、配られたり移されたりして浄火として焚かれた。
- * 「焰を跳び越えれば、幸運に恵まれる」とされ、若者たちの間でよく行われた。
- * 「家畜に火と火の間を通らせたり、あるいは灰の中を歩かせたりすれば伝染病や飢餓を防止する」と信じられた。⁷⁾
- * 「火の点いた車輪で、収穫の良否を占った」とされ、Radford に次の記述がある。

In the Vale of Glamorgan, a cartwheel was thickly swathed with straw. At a given signal the wheel was lighted and sent rolling down a steep hill. If the "fire wheel" went out before it reached the bottom of the hill, then the harvest was bound to be a poor one. If it kept lighted all the way down, then the harvest would be good; and should it be still alight after it had reached the level, the harvest would be abundant. ⁸⁾

(ヴェイル・オヴ・グラモーガンでは、荷馬車の車輪に藁(わら)を厚く巻きつけ、合図で火を点けて険しい丘の上から転がし、丘のふもとに着く前に「火車」の火が消えていれば収穫は貧弱となり、途中燃え続ければ収穫は良好となり、ふもとに着いた後にも万一まだ火が点いていたならば、豊穰となるであろう。)

キンカーディーンシア州のケアンシー Cairnshee では、かがり火の習慣が1945年まで続けられていたが、その村には次のような仕来りがあったとされる。

- * 「かがり火の燃料の抛出を拒めば、必ず不運な目に遭う。」

スコットランドと同様に、夏至祭にかがり火を焚く習慣はイングランド北部地方でも1850年代頃まで残っており、カンブリア州、ノーサンバーランド州、ドラム州、ダービーシア州などでのかがり火の習慣は盛んに行われた。なお、カンブリア州では燃やす薪はナナカマド rowan であり、これはなかなか堅い材質の木で、火が点きにくく7回かまどに入れてもまだ燃えつきにくいとされる(ナナカマドの名称の由来)が、いったん燃え出すと長く燃える木だと言われる。この木が燃やされたのは、何よりもこの木が一般に「魔除け」になると信じられていたからである。またノーサンバランド州のワートン Whalton では、現在でもなおワートンのかがり火祭り Whalton Baal Fire が続けられている。

イングランド西端のコーンウォール州では、夏至祭(と聖ペテロの祝日 St. Peter's Day)には、その前夜にマウンツ・ベイ Mounts Bay 湾を取り囲む山々の頂で大かがり火が焚かれていた。

またペンザンス Penzance や近隣の地域ではかがり火に関連するものとして、火のついたタール樽を担いで街中を走るとか、火の玉祭り Swinging the Fireball と呼ばれる習慣があり、これは鎖の先端に火の玉を結びつけて頭上にかざして振り回す行事である。

1939年以降のことであるが、コーンウォール州のカーン・ブレイ Carn Brey からキット・ヒル Kit Hill に至る広い範囲の山頂でかがり火が焚かれ続けている。これはこの伝統の保存協会によるもので、かつての習慣を復興したものと言われる。このときかがり火のもとでドルイド教の祭儀が行われ、魔除けの薬草、オークで作られた鎌、それにほうきの柄につけたとんがり帽子などを次々と火の中に入れ、魔女や悪霊の魔力を奪おうとする行事も再現される。⁹⁾

悪霊の魔力封じについては、夏至祭の前夜に関して次のようなことが言われている。

- * 「オトギリソウ St. John's Wort を家の前に吊るしておけば、悪霊が入ってこない。」この草花は夏至の頃に黄色い花をつけるが、洗礼者ヨハネの草とか、マヨケソウとも呼ばれており、魔力封じに効くものとされる。この草花は、魔物に取り付かれた家を清めるのにも用いられたと言われる。オトギリソウが家の厄払い(幽霊封じ)に用いられて、「そのまじないではオトギリソウが主人の枕の下に置かれた」との事例が John Aubrey, *Miscellanies* (1695) の記載に見られることを Charles Kightly や Opie & Tatem が記している。¹⁰⁾

オトギリソウを野から摘んできたり、またそれを家の庭に植えておくと次のようなよいことがあると言われた。

- * 「乙女が聖ヨハネ祭の前夜にオトギリソウを摘めば、1年以内に嫁ぐことになる。」¹¹⁾
- * 「オトギリソウは子宝をもたらせてくれる」との信もあったようである。

...by a childless wife, naked, in her garden, which (St. John's Wort) will give her a child before next Midsummer. ¹²⁾

る。

さらにもっと超自然的な伝承がある。

* 「夏至祭前夜に教会堂の入り口で寝ずの番をしていると、教区民全員の魂が教会堂に入っていくのが見えるが、その魂が教会堂に入ったままで戻ってこない教区民は1年以内に死亡する。さらにまた、その見張り番をする者が居眠りをしたりすれば、この人もまた次の夏至祭まで生きていることはない」と言われた。¹⁶⁾

* 「夏至祭前夜に未婚の女性が断食をし、真夜中にきれいな布を敷きパン、チーズ、ビールを載せ、そこに腰を下ろしてまるで食べるかのようなしぐさをすれば、通りのドアが開いて彼女が将来結婚するはずの人が部屋に入ってきて、彼女に乾杯し、お辞儀をするであろう。」¹⁷⁾

夏至祭の日に関するものに、次のような信もある。

* 「夏至祭の日バラの花を摘んで、それをおいておくがよい。クリスマスが来てもそれが摘んだときと同じほどに新鮮であれば、それを身につけて教会に行くとよい。あなたが結婚するはずの人がやってきてそれを手に取るであろう。」¹⁸⁾

かつて夏至祭は、William Shakespeare の *A Midsummer Night's Dream* ¹⁹⁾ で描かれたような超自然的な世界の中にあり、そこでは精霊やまた悪霊が力を振るうのだと信じられていた。科学的なものの考え方がなされる時代の到来とともに、夏至祭に関する多くの信が迷信・俗信とされ、それらはヴィクトリア朝時代における伝統復興の波に乗ることもなかった。(その点では、同じ夏祭りと言われる五月祭の場合とは異なった方向を辿ったのである。)

今日における6月24日の夏至祭の行事としては、定期市、教会堂へのイグサ献納祭、またドルイド教団によるストーンヘンジでの祭儀等が見られる。今日では夏至祭は、実際のところ、比較的目立たない祭日となっている。

4 アメリカ独立記念日 Independence Day, U.S.A. 7月4日

(この記念日は新しい時代の中で始まったものであるため、これにまつわる人々の間での迷信、俗信の類はまず見られないが、アメリカの人々にとっては大切な年中行事の一つである。)

イギリスからのアメリカへの最初の植民は1620年であったが、以来その子孫たちは大いなる苦勞の中でその新天地に生きるうち、この地を彼らの国と考えるようになっていった。一方イギリス本国政府では、あくまでも彼らのことを植民者として、またその地を植民地として考え、本国に対しては特に経済的な面で貢献すべきと考え、かなり重い税を課していた。こうした課税に関して、特に問題になったのが茶の輸入税であった。

ボストン茶党事件 Boston Tea Party とされる事件が発生したのは1773年のことであった。これは、インディアンに扮した植民者たちが、船積みされていた約300箱の茶を

ボストン港の海に投げ入れた事件で、輸入される茶の税に植民者たちが反抗したものであった。彼らは“*No taxation without representation* (「代表なければ税もなし」)”のスローガンの下に、本国の議会で彼らの代表者を送ることを要求した。結局、これは植民者たちが本国政府に税などを課されることなく、この国を自らの国として統治することを欲していることを示すものであった。

植民地と本国政府はいろいろと衝突をしていたが、ついに1775年にアメリカ独立戦争が起きた。1776年7月4日、植民者たちは植民地の最高議決機関であった大陸会議で独立宣言 *Declaration of Independence* を採択し、議長がこれに署名したのである。実は7月4日の独立記念日は、イギリスからの独立を記念する日ではなく、独立宣言の採択と発表を記念する日なのである。

これにより植民者たちは、アメリカを自分たちの国として誇り高く生きようとする道を選んだのである。苦難を極めた戦争は8年間にも及んだが、彼らは最終的には勝利を得て、独立自治を勝ち取ったのである。

この7月4日の独立記念日は法定休日であり、学校も休みである。この日には、アメリカの人々はことさらに自分たちの国に誇りを感じ、今後の発展に力を合わさんことを誓い合う日でもある。街の通りにはあちこちに国旗が掲げられ、賑やかに飾りつけがなされる。軍隊による晴れやかな力強いパレードがなされ、夕べには花火が華やかに打ち上げられ、また夕食にはバーベキュー等が楽しまれたりもする。また休みを利用して田園地方や海辺への旅を楽しむことで、この日を祝う人々も多いようである。

1976年の7月4日には、アメリカ建国200年を記念して大いに祝いの行事が催された。アメリカの人々は、過去において先人たちが命を賭して築いてくれたこの国に、この上なき誇りを感じるとともに、国民の気持ちが前向きに一つのものになるこの日を、これからも大切に祝い続けることであろう。

フィラデルフィア市にはよく知られる自由の鐘 *Liberty Bell* があり、かつて独立宣言の採択を祝うためにこの鐘が鳴らされたと言われる。それ以来、毎年7月4日にはこの鐘が鳴らされているが、その鐘には次の言葉が刻まれてある。

“*Proclaim liberty throughout the land, unto all the inhabitants thereof.*”²⁰⁾

(「この国中に、つまりそこに住まうすべての人々に自由を布告せよ。」)

[次号「収穫祭・万聖節と前夜祭」等に続く。]

Acknowledgements:

貴重なご教示をいただいた Amy Chavez 氏 (元、中国短大講師) に、感謝申し上げます。

Notes:

- 1) "May 24," *The Perpetual Almanack of Folklore*, ed Charles Kightly (London: Thames and Hudson, 1987).
- 2) "September 7, OLD SAYINGS AS TO CLOTHES," *The Book of Days*, ed. R. Chambers (London & Edinburgh: W. & R. Chambers, 1864) 2 vols, vol 2, 322.
- 3) "Whitsun," *Cassell Dictionary of Superstitions*, ed. David Pickering (London: Cassell, 1995) 286.
- 4) "Burial," Pickering, 47 (L).
- 5) "May 24," *The Perpetual Almanack of Folklore*, Kightly.
- 6) "Midsummer," *The Customs and Ceremonies of Britain*, ed. Charles Kightly (London: Thames and Hudson, 1986) 163 (L) - (R).
- 7) "Need-fire," *Dictionary of Symbols and Imagery*, ed. Ad de Vries (Amsterdam: North-Holland, 1974).
- 8) "Midsummer fires," *Encyclopaedia of Superstitions*, ed. E & M. A. Radford (New York: Philosophical Lib., 1949; New York: Greenwood, 1969) 173 (L) - (R).
- 9) "Midsummer," *The Customs and Ceremonies of Britain*, Kightly, 164 (L).
- 10) "June 21," *The Perpetual Almanack of Folklore*, Kightly. / "St John's Wort," de Vries.
- 11) "St. John's Wort," de Vries.
- 12) "St. John's Wort," de Vries. / "Midsummer's Eve," Pickering, 169 (R).
- 13) "Midsummer," *The Customs and Ceremonies of Britain*, Kightly, 164 (L).
- 14) "Midsummer," *The Customs and Ceremonies of Britain*, Kightly, 164 (L). / "May 23," *The Perpetual Almanack of Folklore*, Kightly.
- 15) "Midsummer," *The Customs and Ceremonies of Britain*, Kightly, 164 (L).
- 16) "Midsummer," *The Customs and Ceremonies of Britain*, Kightly, 164 (L). / "Midsummer's Eve," Pickering, 169 (L).
- 17) "Midsummer Eve (and Day)," Radford.
- 18) "Midsummer Eve (and Day)," Radford.
 Pluck a rose on Midsummer Day and put it away. If it is as fresh on Christmas Day as when it was gathered, and it is worn at church, the person you are to marry will come and take it.—
 Devonshire.
- 19) William Shakespeare, *A Midsummer Night's Dream* (1595-96).
- 20) Margaret Joy, *Highdays and Holidays* [ano. H. Funado] (Tokyo: Kinseido, 1983) 54.

Speculation Concerning Superstitions in the Cultural
Background of the English & the Americans —(16) IV
The Year's Celebrations Part 5: On the Customs and
Superstitions of Whitsun, The Queen's Official Birthday,
Midsummer Eve & Day,
and Independence Day of the U.S.A.

Kunihiro FUJITAKA

Faculty of the College of Life Science,

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received October 10, 2007)

It is often said that when people lead a customary life every day, they are apt to become stereotyped. In order to keep their bodies and souls more active, they need some pleasant events, or festivals, in their life which will give themselves moderate tension, much vigor, and above all, lots of fun. People in any time and place seem to have had such festivals in a variety of ways.

In the present writing, we would like to speculate on the customs and various superstitions of some festivals—Whitsun, The Queen's Official Birthday, Midsummer Eve & Day, and Independence Day of the United States of America. As we examine the customs and superstitions of these festivals, we would like to have a better understanding of the cultural background of English and American people.